

鳥取県牧谷古墳群の調査

―後期古墳群の研究(2)―

中 川 成 夫
岡 本 勇 彦
久 保 靖 彦

一 はじめに

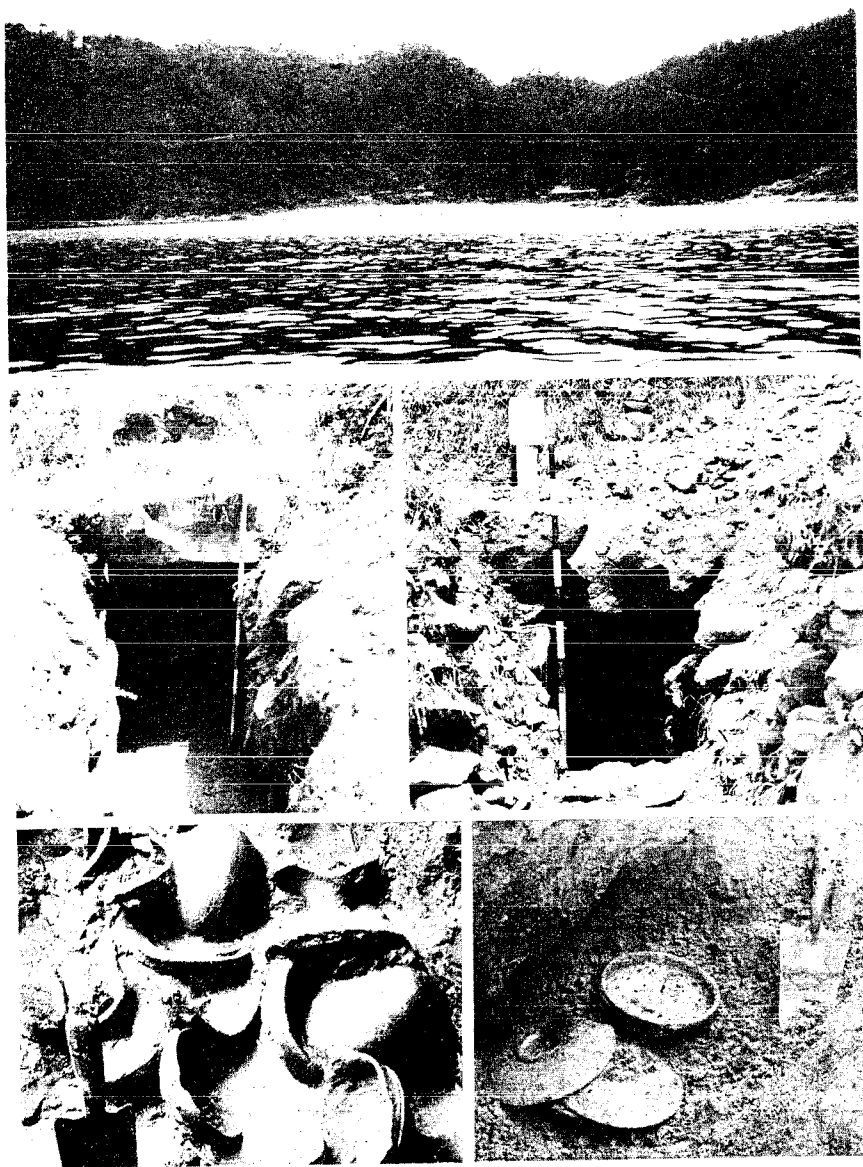
古墳を「群」としてとらえ、その歴史的な構造をあきらかにしようとする試みは、古墳研究における主要な傾向となりつつある。たしかに、古墳をして「歴史」を語りしめるためには、そのような方法がとられる必要があるだろう。私たちもまた、そのような研究の驥尾にふして、ささやかな努力をかさねていきたいと思うが、ここでは一つの小さな古墳群―鳥取県牧谷古墳群―の調査事実を報告し、若干の問題点をかかげて、かかる研究の一端に資したいと考える。

ここに報告しようとする牧谷古墳群の調査は、本学とゆかりの深い、エリザベス・サンダースホーム沢田美喜女史の御厚意と御後援とによって、立教大学史学研究会が主催し、一九五八

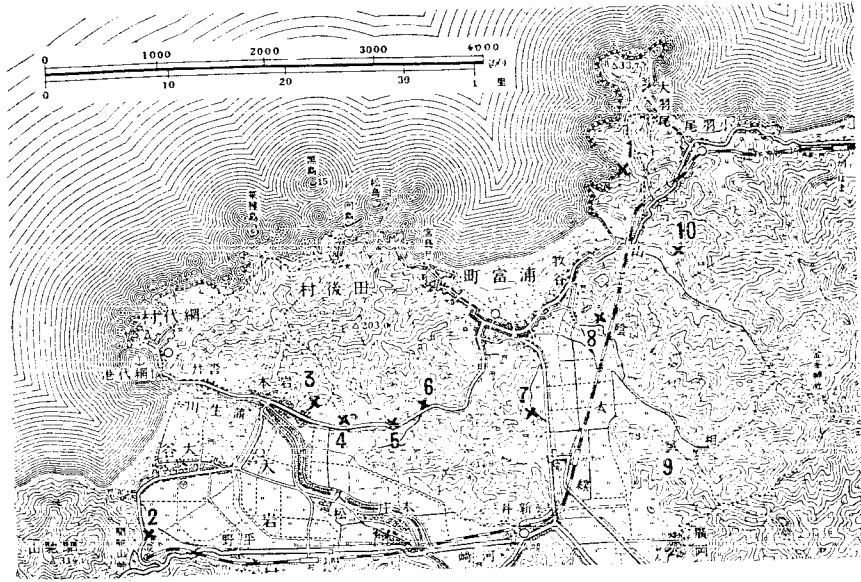
年七月二日から一日までの間にわたって実施したものである。この調査には、私たち三名のほかにも、同研究会員、史学科学生、博物館学講座受講生などの諸君、即ち高田宣武、有村邦子、田谷英浩、藤井博之、小西昌博、遠藤光一、日垣裕美、天野美保子、架川泰寿、佐藤公俊、矢久保麗子、渡辺タカヨ、美川忠正の諸君が参加され、それぞれの作業を分担してくれた。また、この土地の所有者である沢田美喜女史は、こころよく宿舎を提供され、食事等のいっさいの世話をしてくださった。いま、報告をかくにあたり、これらのことを銘記し、感謝の言葉にかえたい。

二 古墳群の位置(第1図・図版一)

牧谷古墳群は、鳥取県岩美郡若美町浦富、牧谷の沢田廉三氏



図版一 (上) 古墳群の遠景(海上よりみる)
(中) 左、4号墳、右5号墳
(下) 銅器の出土、5号墳

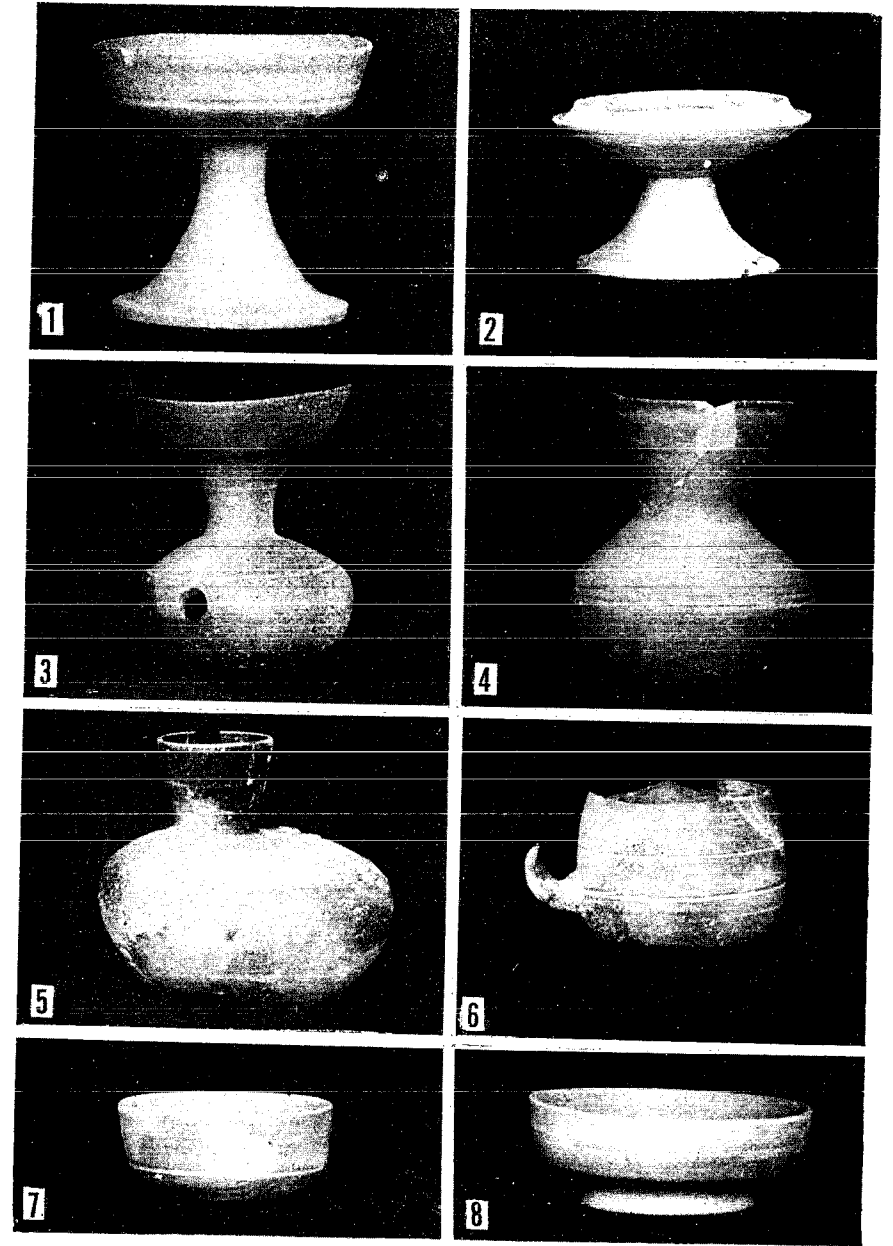


第1図 牧谷古墳群と周辺の遺跡

- 1. 牧谷古墳群
- 2. 小畑古墳群
- 3. 窯跡
- 4. 5. 横穴古墳
- 6. 土器発見地
- 7. 土器発見地
- 8. 須恵器出土地
- 9. 横穴
- 10. 石鏃発見地

別邸内にある。
 岩美町は、鳥取県の西端にあって、日本海に面する。一九五四年、浦富町、岩井町、大岩村、他六カ村を併合して生れた人口約二万の町である。この岩美町の中心をなす浦富の街の北側には、比較的大きな砂丘が発達しており、その海岸は景勝の地として知られている。さらに、その東北には、花崗岩を基盤とする丘陵が半島状につきでており、この丘陵の西側の麓に入江をのぞんで沢田邸がある。そこは、いわば入江の奥部にあり、両側の花崗岩の露頭と、背後の丘陵の裾との間に、わずかな面積の砂浜をのこしている。この砂浜と丘陵の裾とが接する部分のなだらかな傾斜地に、横穴式石室を主体とする八基の古墳が存在する。標高は約四メートルから七メートルのあいだにまたがっている。この場所から兵庫県境までの距離はおよそ三キロをかぞえる。

この古墳群の立地は、かなり特殊であるといわねばならない。背後とその左右には、標高約一〇〇メートルの丘陵が屹立するかのようにせまり、また前面には俗にいう猫の額のような砂浜をへだてて海がひらけている。住居の地とするにはもちろん、墳墓の地とするにしても、ここは適当な場所とは思われない。今日、沢田家の別邸がつけられているが、これは常時の居住を目的としたものではない。また、この古墳群から六

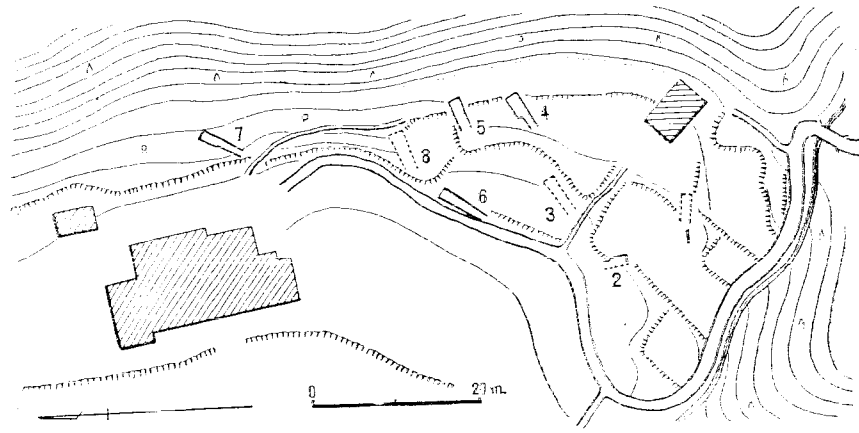


図版二 須恵器 (縮尺約4分/1)

○メートル以内のところには、現在一軒の人家もみとめられないくらい辺鄙な場所である。これらの古墳をいとなんだ人たちの集落の地が、どこにあったかは、いまそれをあきらかにするすべをもたないが、比較的遠隔の地にあったと考えねばならぬ。

三 古墳群の 状態 (第2図)

現在、古墳のある場所のほとんどは、畑地として利用され、しかも階段状に複雑に変形されている。この工事のさいに、いくつかの古墳は破壊され、またいくつかの古墳は損傷をうけた。海辺にそった約六〇メートルの間に、横穴式石室をもつ八基の古墳が分布するが、これらを南から、1号墳、2号墳、3号墳、4号墳、5号墳、6号墳、7号墳、8号墳と名づけた。このうち、1号墳、3号墳は、その形をほとんど消滅し、かろうじて石室の存在を示す証拠をのこすにすぎない。2号墳は、側壁と奥壁の一部をとどめるのみで、他を失っている。4号墳、5号墳、7号墳は、すでに開口し、内部は攪乱された形跡がある。6号墳は、石室の下部をのこすのみであるが、これは一九二八年頃、高松孝治師によって発掘がおこなわれ、須恵器九個、管玉四個、その他が出土したとつたえられる。8号墳は、表面的な観察では、その存在のきづかなかつたものであるが、ボーリング棒によって石室のあるのを探知した。まったく損傷をうけていないらしく、かなりの期待がもたれたが、羨門部付近を露出し、その存在を確認したのみで、調査日程の都合上内部を



第2図 古墳群の分布と地形

概要をあきらかにしておきたい。
七月二日 一二名の調査メモは、午後現地に到着する。しばらく休憩ののち、沢田夫大の案内でこれから調べる古墳を見てまわり、各古墳に番号をつける。
そして、調査の分担を、4号墳・5号墳の発掘、地形と古墳分布の測量、および写真

発掘することは断念せねばならなかった。

以上の古墳のうち、石室の形をのこしている4号墳、5号墳、6号墳、および7号墳は、あきらかにその入口を南西にむけている。また、3号墳、8号墳も、おなじくそれにひとしいものと思われる。ところが、1号墳は、のこされた石の状態からみて、西を向いていたらしく、また2号墳は真北にちかい方向を示している。いずれの古墳にも、現在封土とみられるものの堆積はない。たとえ、かつてそれらしい構造があつたとしても、その規模はきわめて小さなものであつたろう。いなむしろ、これらの古墳は、石室をおおう程度の盛土をもつのみであり、いわゆる封土を有しないのを特色としているのである。

横穴式石室は、のちに述べるように、各古墳ごとにその形状をいくらか異にしている。これは、一つには、年代差にもとづくものであるが、くわしいことはわからない。石室は、いずれも花崗岩の割石積みで築かれているが、その規模は小さく、つくり方は粗雑である。なお用材の花崗岩は、付近の海岸の露頭で容易に採集することが可能であり、極度に大きな労働力を必要としない。

四 調査の経過

現存する古墳のあるものは、すでに攪乱され、またあるものは、遺物採集のための発掘がおこなわれているので、私たちの調査は、それらいわば清掃や、実測に主眼をおかざるをえなかった。つぎに調査日誌の抄録をかかけて、その調査の経過と

撮影の三つにわたった。なお、6号墳その他の調査は、八日以後におこなうことにした。

七月三日 4号墳は天井石の一部が失われ、すでにその個所が開口していたので、そこより玄室に入り、流れこんだ土の排出をおこなう。羨道寄りの部分から、須恵器等が多数出土した。5号墳は、入口と思われる部分を掘りさげ、羨門を構成する割石積みの一部を発見したので、その付近の排土作業をつづけた。測量班は、古墳の分布と地形を二百分の一に作図する作業にとりかかる。

七月四日 雨のため発掘は困難なので、4号墳の玄室で発見された遺物の出土状況について、その実測・撮影をおこなう。他は、昨日出土した遺物の整理にたずさわる。

七月五日 4号墳については、玄室内の排土作業をつづけ、さらに多くの遺物を発見する。5号墳もまた、玄室内の排土にとりかかり、入口付近と平行に作業をすすめる。測量は、ひととおり終了したので、午後から7号墳の発掘に着手し、羨道部の発見に力を注いだ。

七月六日 4号墳、前日姿をあらわした天井石と思われる大きな石が、羨道部を掘るのに障害となるので除去する。かくて、羨道の形があきらかとなり、いわゆる片袖形であることがしれた。5号墳は、ひきつづき玄室、羨道の排土作業をおこない、九分どおりそれを終えた。また7号墳は、羨道部に充満した転石の除去に終始したが、作業は難行をきわめた。落下した天井石等をも排除しようやく床を発見したが、散乱した須恵器の

破片、切の端を見出したので、すでにこの古墳は発掘・掘進されたものと考えられた。

七月七日 4号墳は、隧道部を完全に掘りあげ、發掘作業を一応終了。この部分からも、須恵器が多数出土した。5号墳もまた、発掘作業をひとより終り、実測図の作製に着手する。7号墳の隧道部は、その形がきわめて乱れていたわけであるが、今日はその残存部の撮影およびスケッチをおこない、ひとより調査を打ちきり、女室の発掘にうつる。しかし、これも天井石の各端がかなりしく、作業はその除去でまどった。

七月八日 4号墳の実測を開始。5号墳も、昨日にのぞいて調査をおこない、それを完成する。7号墳については、玄室の掘削作業をひとよすめなれ、また床にまたりしなかつた。そののみ、天井石の安定が悪く、調査に危険をおぼすような状態なので、発掘の見当をつけるために遺物の発見を主とする発掘をおこなった。しかし、須恵器の破片二箇と若干の灰片のほかには、なにも見られなかつた。この部分も須恵器とおなじく、すでに発掘・掘進されているところをあらわさない、一方、6号墳の発掘に着手し、今日に遺跡部に露出した奥壁と、一部の御壁の両面を掘土をおこなった。2号墳も、すでに奥壁と御壁の一部が、他を欠いて、よくは露出しており、また床もあらわされて畑となつておるので、実測図の作製のみとりかかた。

七月九日 雨のため案内にて遺跡の整理・実測などをおこなひ、晴間を待たせ、4号墳・5号墳の測図、ならびに6号墳の掘土作業に従事した。午後は作業を中止し、自由時間とする。

七月十一日 4号墳は実測を終り、すべての作業を完了する。7号墳は、見取り図作製後調査を打ち切り、落盤の危険を考慮して埋戻した。6号墳については、平面、側壁、奥壁の実測をおこなう。また、6号墳の東北側に、8号墳の存在するのをボーリングスタッキによって発見、その入口の部分のみ掘って、差門の存在を確認した。そして、略測と撮影をなし、再調査を期して埋戻した。

七月十一日 6号墳の実測にたずさわるもののはか全員埋戻しに従事。午後からは遺物を梱包し、舟にのせて町まで運ぶ。以上の作業を終つてのち、沢田夫人の案内で周辺の遺跡を見学する。小畑古墳群、横穴、窯址などのいくつかを短時間のうちにみてまわることができたのは、同夫人の好意による自動車が利用されたためであった。

五 古墳の概要

牧谷古墳群を構成する各古墳は、いずれも横穴式石室からなるもので、外部構造のはっきりしたものはみられない。したがつて、ここでは石室を中心に記述をすめたい。

1号墳 これは、いちばん南に位置するのちで、さきに述べたように、すでに破壊され、石室の一部残骸をとどめているのみである。つまり畑として開墾されたさいにこわれ、その石室を構成した石材のほとんどは、段畑の石垣として利用されたが、奥壁や側壁の一部だけは乱された形でこのこっている。これらから石室

の形や大きさを推定することはできないが、この古墳群のなかの他のものと比較して、とくに大きなものでも、またとくに小さなものでもなかつたことだけは疑いなく、またその方向がほぼ西を向くものであったらしいこともたしかである。

2号墳(第3図)

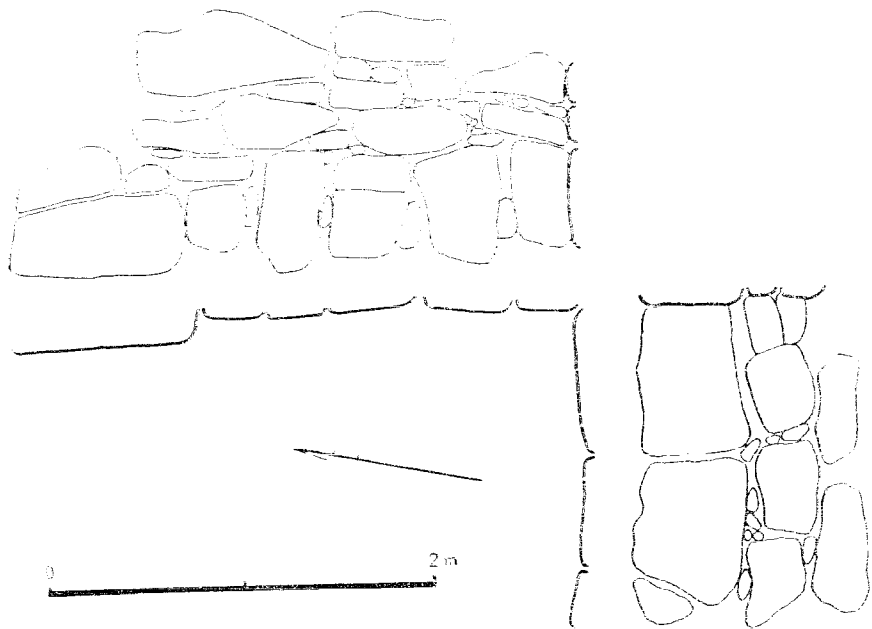
1号墳の北西約一〇メートルのところであり、奥壁と東側御壁がそのまま石垣に利用されてこのこっている。他はまったく除かれ、その部分は畑となっている。奥壁は、一メートル大の花崗岩の割石二個を土台とし、その上により小さな石をいくつか積みあけておいた。御壁は、女室と隧道の一部がのこり、その境には、いわゆる袖がみとめられるので、女室の長さは二メートルをはかることができる。入口の方向は北をさしているが、これは他の古墳と異なるところである。

3号墳

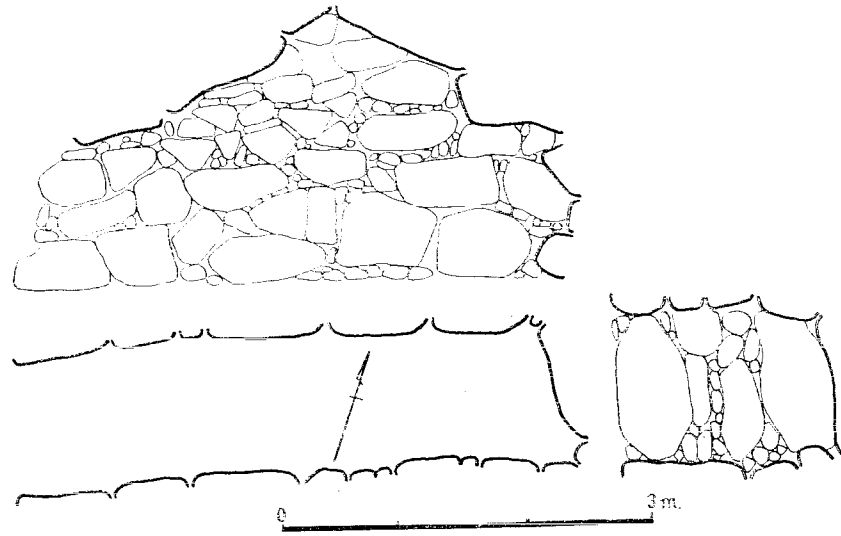
この古墳も、1号墳とおなじように、ふるく破壊され、石室を構成した大きな石の一部をのこしているだけである。2号墳の北中約八メートルのところに、石室の入口と思われる部分と考えられ、それはほぼ南西の方向にのらいていたらしい。

4号墳(第4図・図版一)

3号墳の北東約七メートルの位置にあり、入口は南西にむいている。天井石の一部が露出しており、また開口



第3図 2号墳



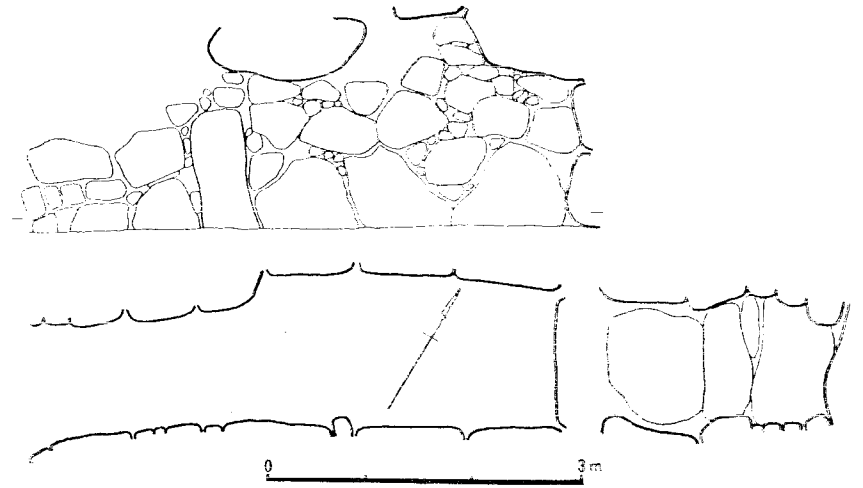
第5図 5号墳

づいていたと思われる。石室の平面は、いわゆるすんどうの無袖形で、その中は一・二メートル前後である。奥壁は高さ一・八メートルをはかるが、垂直ではなく、前方へかたむく。かなり大きな、不規則な剝石を上下において、その間に大小の石をつめている。側壁もおなじように、大きな石の間に無数の小さな石をつめたもので、その高さは中央で二・一メートルをかぞえる。天井は四枚の巨石でおおわれているが、これは奥壁との間にはっきりした稜を示さない。床には自然の転石とみられる小さな角礫が不規則に散在する。

5号墳からは、須恵器の高坏二個、坏二個、および破片若干が出土した。これらは、石室内のほぼ中央部から、かたまって発見されたものである。

6号墳(第6図)

6号墳は、5号墳の西約六メートルのところにあり、入口をほぼ南西にむけている。標高は約四メートルの位置にあり、この古墳群のなかでもっとも低い。天井石等は、すでに失われてまったくないが、石室の土台部の石のこり、そのプランだけをこどめている。それによれば、この石室はきわめて狭長のもので、奥壁から入口までの距離は、七・五メートルにたつする。無袖形のかたちを示しているが、5号墳のようにすんどうではなく、玄門とみられる部分でいくらかくびれている。この古墳については、石室の構築状態を調べるために、奥壁と西側壁の一部を裏側まで露出させてみた。壁は扁平な大きな石を立てただけで、それを裏側からささえる石が僅かにあったのみである。



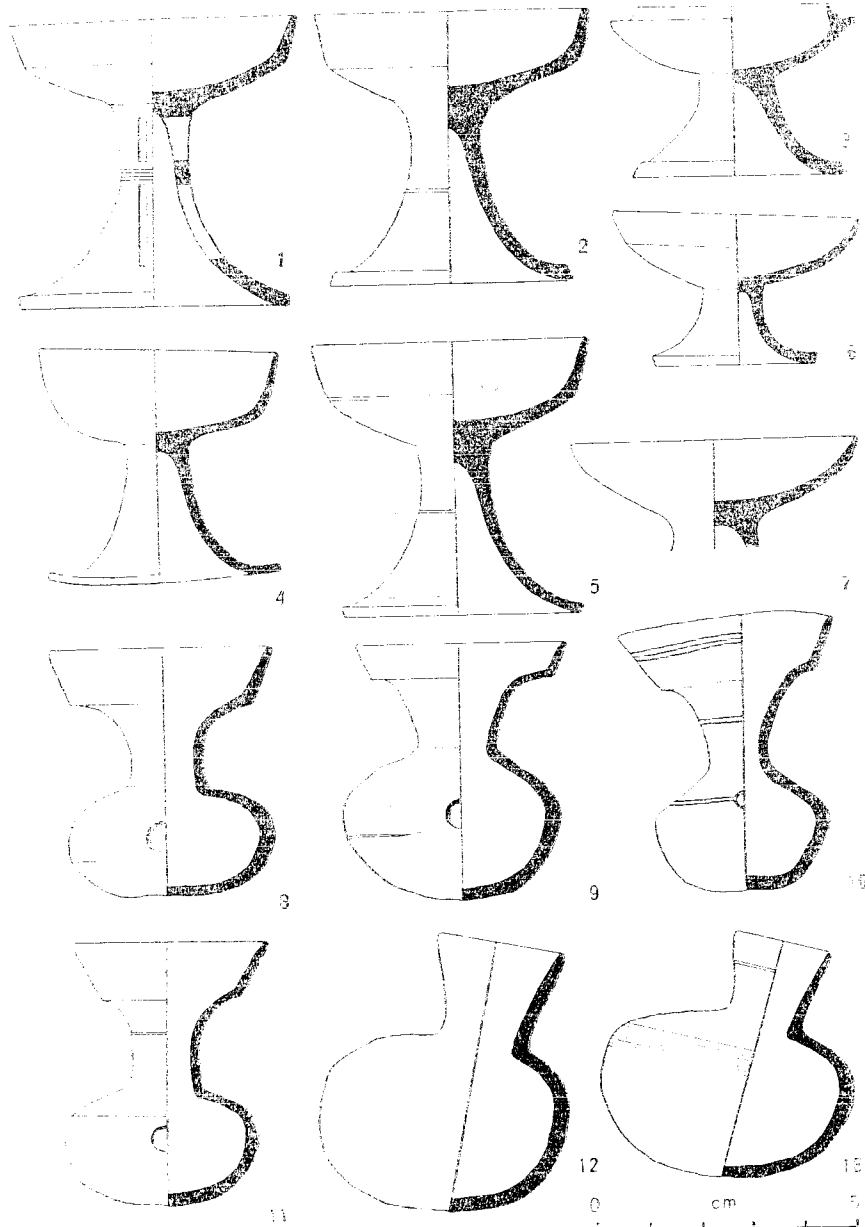
第4図 4号墳

していたので、この部分から石室内に出入することができた。石室は、ほぼ完全な形でのこっており、奥壁から入口までの距離は約五メートルをかぞえるが、その中軸線は羨道部でかなり北側にぶれている。北側の側壁にのみ袖がつくられ、いわゆる片袖形を呈している。玄室は長さ二・八メートル、巾一・五メートルをはかるが、長さの割に巾はせまい。奥壁は三個以上の剝石からなり、側壁は土台部にのみ大きな石を置いている。天井石は三個が現存する。また床には、とくに意識的にしかれたと思える敷石などはみとめられない。

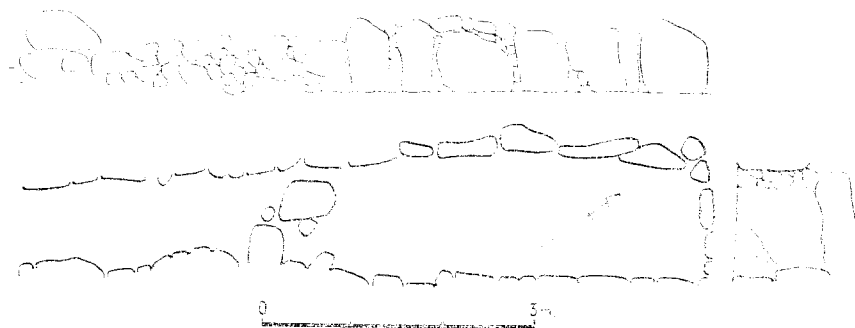
この古墳からは、かなり多数の遺物が出土した。玄室の袖に近い部分に、多数の須恵器等がかたまって置かれていた。高坏八個、罍四個、平瓶一個、埴一個、甕三個、坏および蓋一八個、土師器の坏一個などである。また中央部からは、銅環一個、鉄鍬破片二個が発見された。さらに玄門付近には、刀子一個、須恵器坏四個、平瓶一個が、羨道部には坏および蓋六個が、それぞれ埋っていた。これらのうち、銅環と鉄鍬は浅い土をかぶっていたのみであり、しかもその出土状態は、すでに攪乱されたものと考えねばならなかった。

5号墳(第5図・図版一)

これは、4号墳の北六メートルのところに、それとほぼ平行にならんだもので、この古墳群のなかでもっとも高い位置を占めている。石室の天井石は、若干の土におおわれていたが、なんらの隆起も示していない。現在、奥壁から約四・五メートルのところに入口があるが、かつてはさらにこの先がいくらかつ



第7図 須恵器(1)



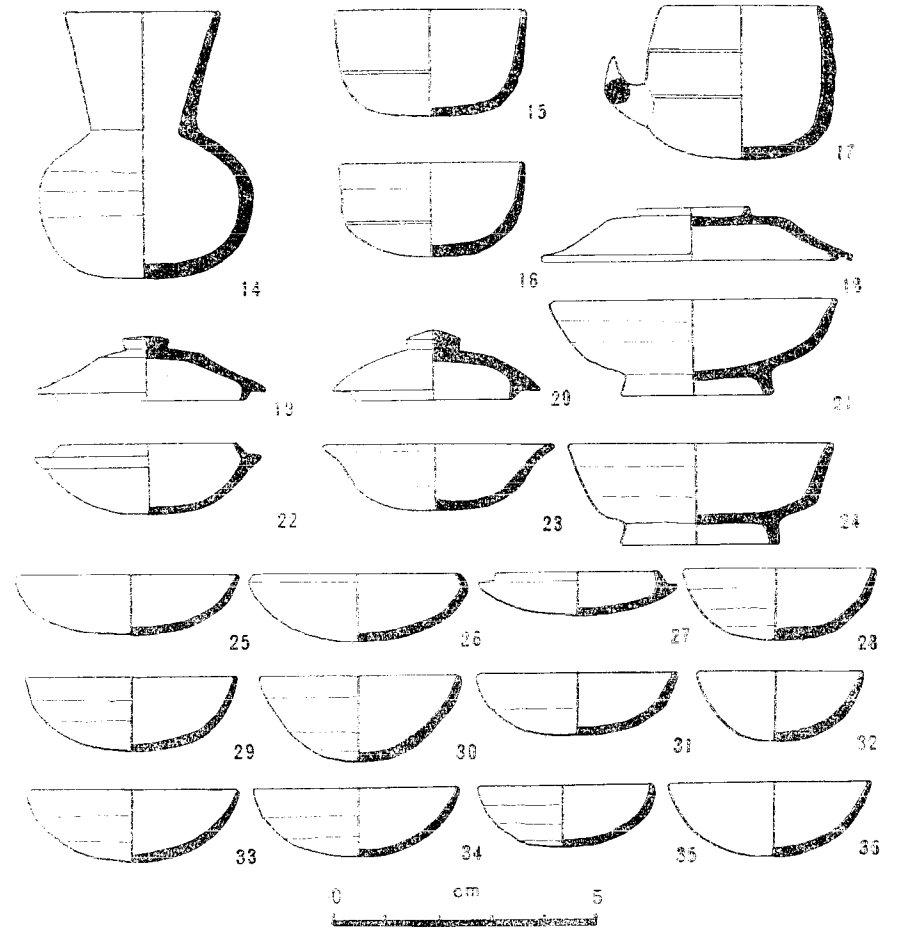
第6図 6号墳

そして、石室をめぐるときには、傾斜面の砂地をカットして、平坦にしていくらしいこともあった、このような構築の方法は、他の古墳にも適用されたであろう。羨道部の側壁に利用された石は、いずれも小さく、まとまりのない。さきに記したごとく、この古墳は一九二八年頃、高松孝治博士によって発掘され、須恵器九個、管玉四個等が出土したといわれる。今回、私たちが石室内に充満した土を排出して

いるさいに、碧玉製管玉一個、土師器・須恵器、および弥生式土器の破片多数が採集された。管玉と須恵器の破片のいくらかは、本来この古墳に属するものであったと思われるが、弥生式土器や古い土師器は、他から混入したものである。すなわち、6号墳の西側の畑地から、ときおり出てくる土器片をここに捨てたということも、併せて語っている。

7号墳
私たちが7号墳をよんだものは、いちばん北のはずれにあるもので、6号墳とは約二五メートルほどはなれている。入口は、他の多くの古墳と同様に、ほぼ東西をむいている。玄室の天井石の一部がはずされ、開口していたが、なかには大きな石や土がつまっていた。また羨道の部分には、側壁と区別がつかないほど完全に転石で埋っており、その全部を掘りだせなかった。かわるに、落盤の危険が大きく、正式な実測図をつくるまでにいたらなかった。玄室は、長さ約二メートル、巾一・五メートルほどのもので、片袖をつくって羨道につながる。羨道は約四メートルの長さをもち、入口の部分はこぼれている。この古墳は、いわゆる崖錐の部分につくられたものであり、それだけに石室の石組みの安定が悪かったであろう。玄室内は、すでに盗掘・搬入されたらしく、私たちの発掘では、須恵器の破片二個がえられたのみである。また羨道からは、刀の鞘口と須恵器の破片若干が出土したが、原位置にあったものではないらしい。

8号墳



第8図 須恵器(2) 36号土師器

これは調査の終り近くに発見されたもので、その存在を確認するために、羨門部の露出だけをおこなったにすぎない。6号墳の北東約五メートルの位置に羨門があり、これは西南西にひらいているらしい。この古墳は、あついで土におおわれているので、石室は完全にのこり、内部も攪乱されていないと信じられる。私たちは、この発掘をいつの日にか期待している。

六 発見された遺物

(第7・8・9・10図・図版二)

4号墳、5号墳、6号墳、および7号墳から、多少の遺物が出土しているが、それを表示するつぎのごとくである。

4号墳(須恵器 四六個

(114)

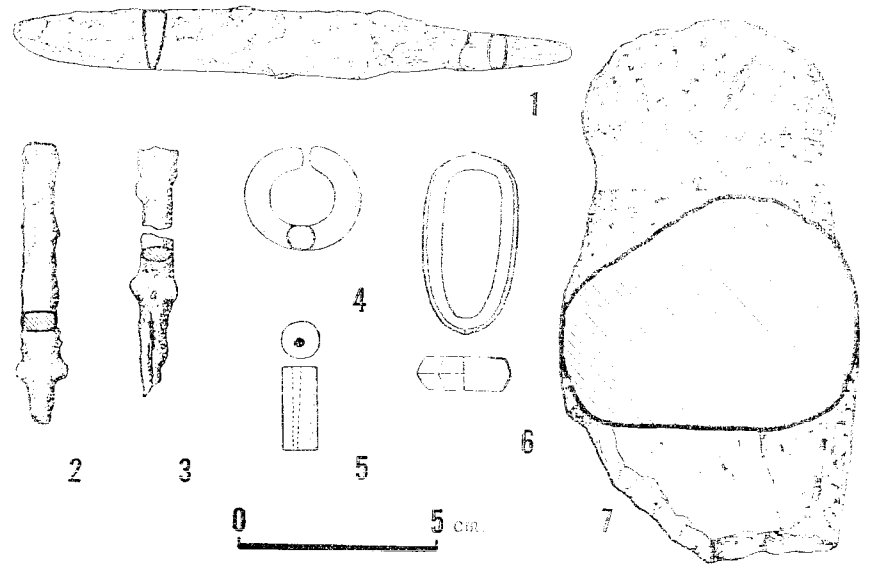
(高坏八、腺四、埴、平瓶二、罍三、坏および蓋二八、破片若干)
 土師器 坏 一個
 銅環 一個
 鉄鏃(欠) 二個
 刀子 一個
 須恵器 五個
 (高坏二、坏および蓋三、破片若干)
 6号墳 管玉 一個
 須恵器 破片若干
 土師器 破片若干
 弥生式土器 破片若干
 7号墳 鞆口 一個
 須恵器 破片若干

に魚状の把手がついている(17)。他はより浅い形のもので、坏にちかい(15・16)。坏および蓋にふくめたものは、かなり多様である。坏のうち高台を有するものは他に比してやや形が大きく、これには小さな高台状のつまみをつけた皿様の蓋がくみあわさる(18・21・24)。また、低いちあがりの蓋受けをそなえた坏が二、三あるが、これとセットになる蓋はよくわからない。蓋としては、つまみをつけたもの(19・20)と、そうでないものとがあるが、後者は坏と区別することが厳密にはむずかしい。坏は、たとえ形が単純であるとはいえ、こまかくみれば部分的な面にちがいがあ(22-35)。多くは平行の縞状のピロロ痕をのこしている。

5号墳から出土した高坏は、坏部が比較的あさく、ともに脚を欠いている(7)。坏の一つは、口縁がいくらか内曲し、また一つは蓋受けをそなえているが、4号墳出土のものとの大差はない(26・22)。6号墳から採集された須恵器は、いずれも細片であり、形がよくわからない。また7号墳からは、須恵器の破片が出ていたが、これの裏面には青海波文がみられる。

土師器(第8図) 4号墳から坏一個が発見されたが、その形は須恵器の坏のあるものに似ており、全面がよく磨かれている(36)。他に坏の破片一個がある。また6号墳からは、かなり多くの破片がえられたが、このなかには古墳とおなじ時代に属すると思われる坏などがふくまれる。

銅環(第9図) 普通の形のもので、直径三センチ、メッキは施されていない(4)。4号墳の玄室中央部から出土した。



第9図 遺物各種

鉄鍔(第9図) いずれも残欠で、根元と尖部を欠けているため本来の形はわからない。断面のかたちがいくらか異なる(2・3)。銅環の付近に散乱していた。
 刀子(第9図) 刃わたり九センチの大きさで、柄部に木質をわずかにとどめている(1)。4号墳の玄門付近から、須恵器とともに発見された。
 鞘口(第9図) 刀の鞘の入口に着装されたと思われるもので、長さ四・七センチをはかる。青銅製らしく、保存はよい(6)。7号墳の羨道部から出土した。
 管玉(第9図) 碧玉製で、長さ二・二センチ、直径一センチ、孔は一方からまっすぐにあけられている。6号墳の石室を埋める土のなかから採集された。

弥生式土器ないし古い土師器(第10図) 6号墳の玄室から二次的に発見された弥生式土器、ないし古い土師器の破片は、ときにその理面をあげたごとく、近時の混入であり、本来古墳とは無関係のものである。6号墳の西側にひろがる畑には、今日でも若干の土器片が散布しているが、それらの遺物もかつてはここに存在したものである。小さな破片であるため、その全形はわからないが、部分的な形から推すと、壺形、甕形、高坏形などのあったことがしられる。刷毛目痕をのこした薄手の土器は、甕形に属するものであり、櫛目の押捺文をもったものなどとともに、弥生式に含められるであろう。また、高坏形の破片の多くは、土師器としてよいものである(第10図)。そして弥生式土器と認定したものは、それのうちでも末期に位置づけられる(第9図)。



第10図 弥生式土器ないし古い土師器

る型式である。一方、土師器は比較的古い時期の所産と考えてよいであろう。
 なお、沢田家から一個の石錘の寄贈をうけた。これは、いわゆる大形石錘の名でよばれるもので、かつて6号墳付近から採集したといわれる。安山岩製で、敲打手法によってつくられている(第9図)。

七 周辺 の 遺 跡

旧浦富町および大岩村には、いくつかの遺跡の存在が知られている。第1図にはその分布を示した。このうちの大部分は、沢田夫人の案内で踏査したが、他は聞きこみによるものである。以下にこれらを簡単に説明しておきたい(第1図参照)。

1 牧谷古墳群

2 旧大岩村大谷にある小畑古墳群は、かつて梅原末治によって紹介されたことのあるもので、数基の古墳より構成される。いずれも横穴式石室を内部主体とするもので、しかも封土を築いている。石室の規模は、牧谷古墳群のものよりはるかに大きく、とくに穴観音をまつる古墳の場合、長さ一メートル、玄室内の高さ三・五メートルをかぞえ、大きな切石で構築されている。

3 旧大岩村岩本部落の東方の丘陵斜面から、須恵器が多量に出土し、窯址であったと考えられている。

4、5、6 いずれも横穴で、浦富から大谷へ通する道路工事のさいに発見されたらしい。かつては、群在していたらしい

が、現在では一部がのこっているのみである。6からは、金銅製の直刀等が出土したといわれる。

7 中学校の建設工事のさいに、須恵器などがたくさん出たとのことである。遺跡の性格はわからないが、あるいは集落址かもしれない。

8 田浦富町相谷の丘陵の麓の梨畑から、二個の須恵器(いずれも卍)が、農民によって偶然の機会に単独の状態で掘りだされた。この遺物は寄贈をうけて、現在立教大学に保管している。おそらく、奈良時代頃に属する年代のものであろう。

9 横穴であるが、くわしいことはわからない。

10 牧谷川の支流にのぞんだ低い台地上の畑地が遺跡であり、石鏃などが発見されたという。

八 牧谷古墳群をめぐる問題

牧谷古墳群は、せまい面積の辺鄙な海岸部につくられた小さな古墳群である。この場所には、かつて弥生式土器や土師器をたすえた人たちが、なんらかのかたちの生活をいとんでいた。なぜ、このような場所に生活の地を求めたのか。すくなくとも、ここでは、農耕をおこなうことはできなかったはずである。漁撈用具としての石鏃などの出土と結びつけて考えるべきなのであろうか。古墳の存在とは無関係であるとしても、この問題を無視することはできないだろう。

私たちは八基の横穴式石室をかぞえたが、これが古墳群を構成するすべてでなかったとしても、ほとんど大部分であったこと

とは、疑いない。その規模は小さく、副葬品は貧弱ではあったが、古墳の立地には注目すべきものがあったと思う。それは石室の用材がえやすいというだけの理由では説明がつかない。理想的には、かれらの集落と、そこでの生活の実態が明らかにされねばならないが、私たちはいまそれにこたえられる資格をもちかない。古墳群の研究は、一方では集落と生産址の調査に結びつかねばならないことを、ここでも教えられるのである。

牧谷古墳群の年代は、発見された須恵器によってきめられるべきであろう。近年、須恵器の編年研究はいちじるしく進んできたが、この古墳の須恵器は、檜崎彰一⁽²⁾のいう第II期4、森浩一⁽³⁾のいう第四期形式、横山浩一⁽⁴⁾のいう「桃谷」様式にもっともちかい形態をそなえている。したがって後期古墳も終りに近く、その実年代は七世紀中頃と推定されるであろう。もっとも、年代の推定のできるまとまった資料の発見されたのは、4号墳と5号墳からのみであり、また各古墳には当然のことながら、時期の前後が考えられるから、いくらかの中を考慮しなければならぬまい。

ひるがえって、鳥取市付近には、宇部神社古墳、古郡家1号墳などのふるそう古墳が、いくつか注意されているが、岩美町付近には、前期的ないし中期的古墳の存在は知られていない。現在のところ、この地域では、小畑古墳群のあるものをもっとも古く考えねばならないだろう。しかし、それとても後期古墳の段階を出るものではないし、牧谷古墳群との差もあまりひらいてはいないだろう。この小畑古墳群と牧谷古墳群とは、時期

的なずれもあるだろうが、また地図をみればわかるように、ゾ

ルンドを異にしており、領域をわけていたとも考えられる。一方、山陰地方の横穴については、山本清、門脇俊彦などの研究があり、その多くは横穴式石室に平行する年代のものと考えられている⁽⁴⁾。岩美町に存在する横穴のうちには、牧谷古墳群と時期の一致するものがふくまれているだろう。もしそうとすれば、このような場合、横穴と横穴式石室の被葬者のちがいを、どのように理解すべきであろうか。

他方、岩美町の南部を占める旧岩井町宇治には、岩井隆寺址が存在し、また式内社の一つに数えられる御湯神社も、そのそばにある。律令時代には、いわば政治的中心の地は、この付近にあったと考えねばならないが、これと古墳ないし古墳營造者との関係は、けっして無関係でなかったはずである。また、和名抄にてでくる巨濃郡は、蒲生、大野、宇治、日野、属城、広田の六郷を含んでいるが、牧谷古墳群とその背後の地が、いずれの郷に属するか。これらの問題の解決も、けっして不可能ではない。今後の研究には、地域を対象とした立体的、かつ総合的な調査が要請されてくるのである。

註(1) 梅原末治「因伯二回に於ける古墳の調査」鳥取県史蹟名勝地調査報告第二冊

(2) 檜崎彰一「後期古墳時代の諸段階」名古屋大学文学部一〇周年記念論集、森浩一「和泉河内案の須恵器編年」世界陶磁全集第一巻、横山浩一「須恵器」世界考古学大系3

(3) 大村雅夫「鳥取県における地域政治的集團の形成過程」考古学研究第八巻第一号

(4) 山本清「西山陰の横穴について」鳥取大学論集(人文科学)第八号